

## 虚学のすすめ

村田 全

—

日本には大学が多い。(むしろ大学らしくない大学が多過ぎる?) 二十年余り前(一九七二年) ヨーロッパで「東京には大学が六つもあると聞くが本当か」と訊ねられたことがある。私は、相手が世情に疎い老哲学者で、しかもまじめな質問だっただけに正直には答えられず、「ええ、もう少し」と言うのが精一杯だった。彼の頭にある大学の水準に照らして、日本には大学が何百もあるなどと答えたのでは、日本の文化水準そのものが軽んじられるように思えたのである。

日本の大学の根底には何か大きな空洞があり、それは埋められるどころか近頃ますます大きくなるようで不安である。大学は本来、学問の場のはずなのに、この当然のことを改めて強調せねばならぬのが現代日本の大学の貧困だと思う。もちろん、学問だけが人間にとって価値ある仕事なのではないが、学問がその一つであることに疑問の余地はない。しかし日本の大衆は大学を就職の手段とのみ考え、学問の場とは考えていないように見える。この責任は大学側にもあるが、その大半は、直接の利益のない学問など無用の長物と見る日本の社会の姿勢にあ

るのであろう。この問題には後で触れるとして、しばらく学問について考えよう。

学問とは何か。これは一言では言いにくい。学問にも色々あり、その目的も多種多様ならばその成立過程も千差万別である。しかしここでは私の念頭にある学問のイメージを示すため、とりあえず次の三点を挙げる。先ず、学問はその目的が何であれ、そこに純粹に知的な好奇心が働いていなくてはならない。次に、学問は学校でこそ既成のものとして学科に分けて教えられるが、文科と理科の区別まで含めて、それらはすべて混沌の中から形成され分類されたものであり、今も同じ形成流動の過程の中にある。最後に、学問に新しい道を拓く仕事は、いやというほど骨は折れるが創造の夢のある楽しいものであって、性質こそ違え芸術的創造とも共通点がある。以下、この三点から学問を考える。私に言わせると、本当の大学では若者に先ずこれらのことが示されるべきだと思う。

## 二

人間には「なぜ」とか「どのように」などのことを訊ねる能力が先天的に備わっているらしい。知的好奇心とはこのことで、「哲学する心」と言い直してもよい。哲学の原語(philosophy)はギリシア語で、知恵(sophos)を愛する(phileo)こと、平たく言えば、何事でも根掘り葉掘り知りたがり、不思議なことを不思議として探求する「好奇人間」は哲学しているのであり、それが学問について私が先ず抱くイメージである。「哲学する」という動詞はドイツ語の‘philosophieren’がかなり広く知られているが、英語やフランス語にもある。

ここで言う哲学は必ずしも学校で教えられる「哲学」のことではない。教壇で教えられるのは、いわば「哲学学」である場合が多く、「知恵を愛した」学者達の記録ではあっても、われわれが「知恵を愛する」時の参考には

必ずしもならない。私はかつて幼い子供から、昨日の太陽と今日の太陽とは本当に同じなのか、地下をもぐってくるのかと訊ねられて、ぎよつとしたことがあるが、その子供はその時、正に「哲学して」いたのだと思う。

このように愛知の学は最も単純で当たり前のことにも、とらわれぬ心で疑問をもつことに始まるが、これが進んで既成の知識の十分な基盤に立ちながら、その基盤自体の当否にまで批判の目を向けるとき、それは個々の科学を対象とする学問、つまり「哲学」として、しばしば学問上の根底的な創造につながる。そして現代日本での学問教育に欠けているのは、愛知の学——哲学のもつこのような面についての配慮であろう。

次に、学問が創られるものであり、そこには夢があるということだが、実は多少でも学問研究に携わったことのある者には、これは至極当然のことである。実際、研究者にとって学問とは各自の開拓すべきもの、最終的にはそこに何か新しいことを建設すべきものであつて、常に流動未完の形をとる。しかもそれは積み上げられ拡大されるのみでなく、常識化した知識との不断の戦いであり、時には根本的な出直しさえ要求される。ここには研究者の苦しみもあるが、また他に求めようのない夢や楽しみもある。芸術的創造に似ているのはこのような意味である。

一方、学校で教えられる学問はそのように形成途上の不確定な知見でなく、「確実」と見える既成の知識である。もちろん、「読み書き算盤」などの基本教育を本来の任とする小学校、中学校まではそれでよいが、それにしても上の子供のような疑問や不思議さ、それらの知識の根底にある不確実さ、人が知識を確実にしてきた過程などへの知的欲求は<sup>おほ</sup>圧えられる。しかし本当はそれらの知識を受け身でなく積極的に、疑問を挟みながら考えて行くときにこそ、学問への関心は生まれるのである。もし更にそれらの疑問を自分で解こうとし、その基本や先々の展

開まで考え始めたら、それは既に学問の始まりであり、学問上の夢の育みである。そして事実、学問上の多くの発見は夢に始まるのである。大学ともなれば、理想的に言えば高等学校からでも、このことは注意されて良い。

これを別の面から言うとは、先生の語られることの一から十までが真実とは限らないのだから、学生の方も疑問は疑問、分からぬことは分からぬとして真剣に質問すべきである。私の経験で言えば、日本では教室で質問の出ることが滅多になく、学会でも似たようなものだが、対照的にフランスなどでは学校でも学会でも質問がその場で頻々と出る。時間を懸けて話を聞くのだから、分からなければ損という気持であろう。これは学ぶべき態度である。

以上は学問志望の学生にだけ言うことではない。多くの学生は卒業とともに学問から離れるが、それでも学び得た学問ないし学問的精神を仕事の中で活かし、大なり小なり何か新しいことを創って社会に寄与しているならば、学問ないし学問的精神はそこに活かされているのである。むしろ学問を続ける学生がすべて学問的創造に關与しているかという方が問題で、それは「創造」という言葉の意味如何による。その人達の中には、理科系、文科系を問わず、その学問領域で優れた仕事をしている例も少なくないにせよ、既成の学問ないし技術をその線上で前進させることはできても（そしてこれも極めて大切で大きな努力のいる仕事だが）、質的に新しいものの創造となるとその例は少数になる。基準を高くとれば、それは何十年、何百年に一度あるようなことと言ってもよい。

最近この国ではしきりに国際化ということが口にされるが、正直に言つてこの国に生まれた学問や思想が人類全体に寄与したことはまだない。偉大な宗教家、哲学者、数学者、自然科学者など、およそこの方面で人類の運命に影響した人々の出身地と言えば、古代ではシナ、インド、ギリシア、ユダヤ、中世ではイスラーム、近代以後は

圧倒的にヨーロッパであり、日本はそれらから恩恵を受けるのみである。空海や親鸞や道元のような優れた宗教思想家が生まれたことはあるが、言葉や地理的な制約もあって世界的にはなっていない。最近、数学、自然科学、技術、医学などの方面で日本人の活躍が目立ってきたが、それでも既成の路線上でのことが多い。サルの生態学が世界をリードしたり、西田哲学が欧米の哲学者の注意をひいたりしているが、これとてもまだ人類の運命にまでは関与していない。しかし私は日本の学問の目標をこの辺まで高め、教育の問題もその下で考えたいのである。

### 三

ここで本章の標題に掲げた「虚学」について述べる。これは余り見慣れない言葉かも知れないが、虚学とは何かを説明するには「実学」という言葉から始めるのがよい。例えば『広辞苑』第四版(岩波)にも「虚学」は出ていないが、「実学」「実学主義」については次のような記述があり、その反対が「虚学」だと思えば良いわけである。(一)内は第二版に記載)

**実学** 「真理のためというよりも」①空理・空論でない、実践の学。実理の学。②実際に役立つ学問。応用を旨とする科学。法律学・医学・経済学・工学の類

**実学主義 (realism)** 「観念よりも」事実・実践・経験または応用・実験を重んずる立場。形式化した人文主義の影響を受けた古典本位の教育に反対して一六世紀に起り、一七世紀以降、自然科学並びに経験論に影響されて有力になった。わが国では福沢諭吉が提唱

つまり虚学とは不用不急の学問のことで、文学、歴史、哲学、思想などの人文科学を始め、自然科学や社会科学

学のもつ思想、哲学、歴史などの人文科学的要素を指し、時には応用抜きの純粹数学や理論物理学などまでも指し、より広くはこれらの各要素を根底にもつ人間的教養を指すこともある。以下では便宜上この狭義、広義を一応区別して話を進める。

さて、私の当面の目的は日本の教育ないし文化のために狭義の虚学をすすめようとするものだが、その根拠は虚学が必ずしも「虚」な学問ではなく、しばしばその学問、あるいは広く学問的思想一般の上で、創造的な仕事に本質的に寄与しているという歴史的事実にある。実際、古代ギリシアの自然哲学や数学は決して目の前の利益を求めらるるものでなかつたし、今日の科学技術時代の発端である近世ヨーロッパにおける数学や自然科学の革命（デカルトやニュートンはその代表）もまた同様である。そして私はこのような思想上の革命的な出来事が、今後とも歴史の中で二度と起こるまいとは考えず、人類にはまだ残された可能性があると見ている。生物体や社会組織のもつ有機的な全体性に関する古くして新しい問題の一つの現われのように、純粹数学、工学、生物学、社会学などの境界領域にこの数十年間に起こり日本からの寄与もある新しい学問、カオス、フラクタル等はその先駆けかも知れない。（後二者は一見、偶然で出鱈目でたらめと見まがうような非決定論的な現象や図形を、比較的簡単な数学的手法の力を借りて決定論的かつ具体的に表現、説明する理論で、数学は、従来全く手が付かなかつた対象にこの方向から近づき始めている。）私はいつの日にか日本語文化圏の中でこの種の虚学的かつ革命的な寄与が生ずることを期待している。

虚学がそれほどの役割を果たしたのには、より深い根拠がある。ギリシアや近世の例から推測されるように、虚学と実学とは人間の営みとしての学問がもつ本質的に相補う二つの面なのである。ここで私は多少割り切つて、自

然科学に限らず学問の実用的な面を経験的世界とともに実学に結び付け、非実用的な面を観念的世界とともに虚学に結び付けることにする。こうするとたいいていの学問にはその二つの面が濃度の差こそあれ見いだされるもので、一つの文化圏の中で実学が万能視され虚学が軽視されるという状況は決して望ましいことではない。ところが日本では学問といえば科学技術というに近い状態で、虚学的な学問は研究費その他多くの点で大いに冷遇されている。しかしこれでは学問のバランスが崩れていて、学問全体ないし文化の進展のために良くないであろう。

一例として実学の代表のように思われるコンピューター科学をとろう。この場合にも「既成の」進路の上を能率や利潤を求めて前進する実学的側面の他に、その進路そのものについて思弁し批判する方向がある。これは一見、回り道に見えて、しばしば一段と高い創造活動につながる方向だが、日本の技術者はこの種のことを余り得意でないと聞いたことがある。更にコンピューターが人類に及ぼすであろう影響について、単に薔薇色の将来だけを謳歌するのではなく、そのもたらすであろう様々の暗い面まで分析し、人類史的な視野において考察するような仕事がありうる。これもコンピューター技術の開発と並んで重要な主題だが、これなどは専門の技術者から見れば虚学的問題と見られるかも知れない。学問のバランスと言ったのはこのことである。私は、日本の教育がせめてこの種の問題を考える程度の長い視野をもつものであつて欲しいと思う。

#### 四

狭義の虚学に関することは以上だが、広義の虚学つまり人間的教養となると同じようには「すすめ」にくい。これは、一つには専門家が必ずしも教養人でなくてもよいのだが、また一つにはそれが教育の可能性の問題を超

えて、個人の天分、生活環境、社会の雰囲気など、天賦の要素に大きく左右されるためである。個人の運命に属するこの種のこと「教育」の対象になり得るかどうかが、私はいささか懐疑的である。

先ず、専門家必ずしも教養人たるを要せずというのは実はその通りで、時には教養が専門家となる妨げになることもある。少なくとも、たとえ広い視野は欠いていても専門の分野で良い仕事をした人は、その反対の人より学者として立派であることが多い。困るのは、優れた専門家の中に例えば地位や名声という実益に（或る程度は当然だろうが）過度にこだわる人がいて、人間性の点でしばしば問題を起すことである。病人や家族に何一つ告げず、危険な新薬の試験を病人に施したりする医学者などを見ると、人間的教養の欠如どころか人間性の荒廃を見る想いである。この精神的荒廃が教育で救えるものかどうか、現代日本社会の指導層の一部に見られるこの荒廃はどこから来て、どうなっていくのか、心許ない話である。

次に個人の天分は別として、日本社会の雰囲気や伝統となると問題が多い。精神主義がしばしば狂信的に語られるくせに日本の精神的風土は意外に現実的・功利的で、その傾向は今日いよいよ加速しているように見える。また一方、个性的であることや筋道を立てて議論するのが不得手で、有<sup>う</sup>耶<sup>や</sup>無<sup>む</sup>耶<sup>や</sup>の内に大勢に順応する傾向がある。これらは共同作業を前提する農耕民族の伝統かも知れず、そうだとするとその根も深いわけだが、ともかく学問にとつて良い地盤ではない。学問は本来、個性ある個人やグループの仕事であり、この点は実学、虚学、またその広狭にかかわらず言えることだからである。多数が走りだしたときに、立ち止まってその動きの良し悪しを自分で考えることの大切さは単に学問に限ったことではないが、それを推進するような教育は日本の社会においては推進されるどころか、分野によつてはむしろ圧迫されている。

例えば日本史などはその例で、戦前の国家主義的歴史観などもなかなか払拭ふつしよくされない。自国、他国の別なく民衆に対する戦争責任や謝罪は有耶無耶うやむやのまま、「朝鮮併合も前の大戦も侵略ではない」などと放言する政治家がいて、隙あらば狂信的感情的な「国史」を復活させようとしている。また感情的にそれを支持する大衆がいる。伝統的な事大主義、偏狭な愛国心、百年に及ぶ教育の偏り、為政者の隠れた意図、これらが相集まってこの結果を生んでいるのであろうが、いずれにせよ今日の指導層の場合、その教養、見識の低さが嘆かわしい。彼らもせめて十九世紀の欧米の植民地競争にも言及するなり、原爆投下の責任を問うなりすれば、それはそれなりに筋が通るが、この方は貿易摩擦などの損得勘定が働くのであろうか、もう一つ迫力がない。彼らは精神を論じつつ、実は適当に現世的利益を忘れていないらしい。

そもそも国家の概念にしても、それがさほど絶対不変の存在なのかどうか、一度自分の頭で考えてみてよいことであろう。現代的な国家概念が大昔からあり、将来もそのまま続くだろうというのは没歴史的な幻想に過ぎない。この国では「国家とは何か」を批判的に考えるような「悪しき」虚学はなかなか育たないだろうが、これは二十一世紀の政治学ないし政治哲学にとつて最も重大な問題になるだろうと私は考えている。

もともと、門外漢の私がこんな考えをもつのは、手近なところで、国家ないしそれを支える資本主義体制の学問への強力な介入のせいである。国家という体制は現実的ではしばしば近視眼的だが、戦前の思想統制時代はもとより、今でも例えば研究費などを介して学問の研究までも管理しようとする。この事態は今日、もはや日本だけではなく、全世界的に科学技術の方面で著しいが、日本の場合、基礎理論の方面は弱く、ましてその背後の物の考え方、人間や文化に関する考察などは大体無用の長物視されるため、特にその傾向が顕著で、しばしば遠大な視

野が欠ける。「人、遠慮なければ必ず近憂あり」で、これは単に学問上のバランスの喪失という以上に、現在、日本がかかえている経済問題その他に対しても、長い目で見ると決して有利な道だとは思えないのだが。ともかく、現代の日本が物質的な面では進んでいるが、精神的な面では底が浅いとされるのも理由のないことではない。

イソップ物語に、鹿が水鏡に映る自分の角に見ほれ、脚の弱々しさを恥じていたところ、獅子に襲われて逃げられたのは脚のおかげで、最後に食われたのは角が木に引かかったためという話があるが、自然環境の保全や精神文化の伝統を忘れて物質文明の発展のみを謳歌することが鹿の角にならないでほしいものである。

## 五

私はここで対照的に十六・十七世紀フランスでの理想的人間像、オネトム (*honnête homme*) のことを思い浮かべる。これは辞書では「君子、紳士」などとされているが、専門に偏らない広い知識をもちながらそれをひけらかすことなく、豊かな人間性を備えた理想的教養人のことである。ルネサンスの思想家、モンテーニュに始まるもののように、パスカルは『パンセ』の中に次のような言葉で始まる一連の断章(三五〜三八)を残している(前田陽一氏の訳による)。

オネトム。

人から「彼は数学者である」とか「説教家である」とか「雄弁家である」と言われるのでなく、「彼はオネトムである」と言われるようであればならない。この普遍的性質だけが私の気にいる……

これは私の言う広義の虚学を理想化したような人間像だが、この理想を実現するのは大変なことで、当時のフ

ランスにもざらにいたとは思えない。ただ、こうした人間像が理想とされたという事実は重い。もちろん、これは東洋ないし日本の理想的人間像とかなり違っており、日本の政治家、実業家から学者まで、専門家はすべてこうあるべしとまでは言わない。しかしこれは現代日本においても一つの理想的人間像でありうるであろう。大きく言えば、これを理想と見るか閑人の白昼夢と見るかで、日本文化の将来の方向には大きな開きが生ずるように思われる。

ここでエリット教育について一言する。問題はオネトムという理想が、一握りの知的エリットの、そのまた一部にしか期待できないことである。しかしこれはこの頃よく聞かされる才能教育、個性教育などとはかなり隔たっている。こちらは相変わらず実学過剰のように聞こえるからである。もちろんたとえ視野は狭くても（学問であれ何であれ）その専門領域で打ち込んでくれるエリットを育てるならば良いのだが、今日の社会的雰囲気の下で下手をすると、それは人間性の乏しい「困ったエリット」の温床になるおそ惧れなしとしない。しかもこれは、現代日本社会の問題と言う以上に人間の本性につながる問題でもあって、事はますます難しい。エリット教育が困るのは正にこの点であろう。

しかしエリット教育は良くないと言ってみても、音楽家や運動選手には現にエリット教育が行われている。こちらには天分があるが、学問の能力は万人平等だというのだと、これは少々おかしい。スポーツマンがスポーツに夢中になるように、ものを知ること、ものを考えることに純粹に熱中する若者、つまり学問上のエリット候補者は必ずいるもので、それにふさわしい教育があることはむしろ自然であろう。

ただ断っておくが、私がここで考えている真の知的エリットとは、良い学校に入って世間的に成功する秀才型

の人のことではない。念頭にあるのは、虚学、実学を問わず学問を好み、かつ広く豊かな教養と人間性を備えたオネットムの人物である。しかもこの種のエリット候補が開花するには、いわゆる「利根、氣根、黄金」の「三こん」に加えて「運、根、鈍」、特に運の善し悪しがものを言うから、彼らの行く道は危険な賭である。また成功しても報われずに、先駆者としての苦難の道を歩むことがある。この意味でのエリットの道は、しばしば時流に逆らう苦しい試みである。しかし本当は、真に新しいもの生まれるのもこうした試みの中からであることが多い。私四節で「広義の虚学はすすめにくい」と言ったのも、そのくせ、それについて長広舌を振るったのも、こうした事情を踏まえてのことである。誤解を恐れずに言えば、学問とは、所詮、知的エリットの仕事なのである。もちろん、人間の大切な仕事学問以外にも数々あることは重々承知の上での話である。

実は、オネットムのエリットを理想とする雰囲気は、戦前、旧制高校の中にある程度存在した。（しかしそこはまた「困ったエリット」の温床でもあったから、エリット教育はやはり難しい！）この理想を真正面から掲げたのは、敗戦後にできた新制大学（つまり今の大学）の教養部である。当初、これは新制大学の理念の核心とさえ言われたが、結局、日本社会の伝統には合わなかったようで、一九九四年現在、大学の専門化推進の旗印の下で消え去ろうとしている。これには教える側にも教えられる側にも、それ相応の理由があつたのも確かだが、結局は日本の社会がそのような学問を育てるまでに成熟していなかったのである。

（これを書いていたとき、たまたまヴァイオリニストの諏訪内晶子さんがチャイコフスキー・コンクールで一位になった後、演奏を深めるべく二年ほど演奏活動を休んで哲学と政治学を学んだという話を聞いた。彼女はその順調な道の上で、なおかつオネットムへの道を歩んでいるのであろう。それにしても、彼女が日本に留まってい

ても、やはりそうなり得たかどうか、そこが問題である。)

## 六

断っておくが、私は現在の大衆的な大学が悪いことばかりだと言っているのではない。民族の知的平均値を上げる意味では数百の大学にも存在意義は十分にある。しかしそれだけではオネトムの人間はもとより、個性ある独創的な学問もなかなか育たないのではないか、と言っているのである。

また私はここまで日本の伝統を貶<sup>けな</sup>してばかりきたようだが、実はそうではない。私は過去の日本の絵画、彫刻、建築などを世界史的に見て一流と評価している。日本の音曲、芝居には無知だが、文学となると、本当に読めるのが日本語の作品だけということもあつて他に掛け替えがない。芭蕉の(俳句というよりも)俳諧芸術などは世界の文学史上、類例のないものと見ている。これら、そして強く言えばこれらだけが私の日本への愛着の真の源である。学問の面でも、この民族は古くはシナ、朝鮮、インドに学び、これを永年に亘つて消化吸収した上で自分なりに展開してきた。密教、禅宗、浄土宗などの展開、江戸時代の儒学、国学などの勃興はその実例であろう。またここ百年、長く見ても三百年の間にギリシア以来の西欧文化をある程度自分のものにした。これは古くはイスラームや近世西欧に見られた類の、世界史上稀にみる現象と言つて過言ではない。この意味では、日本文化の伝統には素晴らしいものがあり、またその将来にも東西文化を止揚して人類文化に新しいものをもたらす可能性だけはあると言えよう。

例えば、私が今まで日本民族の欠点のように言つてきた大勢順応の傾向にしても、現代世界の学問の伝統の上

に立ちつつ、これを異文化間の調和、あるいは自然と技術との調和などの方向で、例えばシステム論の哲学について新しい思想に練り上げることができれば、事は公害問題や南北問題にも関連してきて話は全く別になる。私が上で身の程知らずの国家概念批判を持ち出した時にもこの問題が頭にあつたのだが、ただ、いずれにしてもこれは極めて難しい問題で、あくまで可能性にとどまる。しかも日本の教育の現状は果たしてこれにどう答えようとするのであろうか。

このような事情を見渡す時、私は一方で日本文化の将来に大きな期待を寄せながら、他方、つい悲観的な見方に傾かざるを得ない。所詮、私の虚学のすすめは、自分の理解する日本の文化の伝統の名の下で同じ社会的伝統に刃向かう蝨螂とうろうの斧のようなものかも知れない。しかし私の念頭を去らないのは、実学過剰に陥った日本語民族の将来についての憂いである。あえて言えば、私は「日本の国」とか「日本国民」とかいう言葉に、戦時中の中学時代以来、反射的に拒否反応を覚える人間だが、その分だけ日本語と呼ばれる美しい言葉をこよなく愛惜している。それだけに、日本語をもって創られ表現される文化——それもまた虚学か——が、人類の滅亡——それはいずれ確実に来る——の遙か以前に消滅してほしくないのである。

## 七

以上の議論を補う意味で、虚学が意外に実生活に影響した例として、先の敗戦時の日本とドイツにおける教育改革のことを考えたい。

当時、日本の学校制度はアメリカの占領軍の圧力の下で質的な変革を蒙り、旧制大学を頂点とする学問的伝統

はこれによって断ち切られた。旧制高校の消滅もこの時である。この改革は軍国教育の排除、教育の民主化などの良い結果も生んだが、その反面、外からの急激な変革に伴う後遺症もまた残した。私は、そこに得られた程度の「良い」結果ならば、当時の大学制度の保存修正でも獲得できたのでないかと思うだけに、明治以来百年の間に一応形成されていた学問的伝統が新制大学によって十分には受け継がれず、大きく変質して今日に到ったことを残念に思っている。これは回顧趣味の言葉ではない。漸進的改革はともすれば過去に流されるが、伝統の表面を抹殺するだけの革命は根付きにくいとの意味であり、上のわが蟻螂とらとらの斧の思いにもつながるのである。

この改革はアメリカの一部の教育学者による「実験」だったという話があり、また彼らが日本人の識字率の高さなどの文化的水準を知らず、教育の水準を低めにとったためとの話もある。そうだとすれば、これは占領軍が日本に残した罪悪の一つであろう。これに対してドイツでは、旧教育制度から全体主義的要素が排除されただけで、それ以上のことは起こらなかった。さすがのアメリカも、自分の文化の源の一つであるドイツに対してそこまで根本的な「実験」はできなかつたのである。

この差の生じたなお一つの原因として、当時、教育の指導的地位にあった人物の差があったという話も聞いたことがある。当時の文部大臣、安倍能成氏は戦時中にも或る程度まで自由主義的態度を崩さなかつた硬骨の啓蒙的哲学者で、旧制高校を中心に芽生えつつあった学問的伝統を守るべくアメリカの圧力にかなりの抵抗をしたが、結局押し切られたという。他方、同じ頃ドイツで指導的立場にあったのは、ハイデルベルク大学の総長代理だった哲学者ヤスパース教授である。彼も戦時中、節を曲げなかつたが、それだけでなく実存哲学の創始者として世界的に知られており、占領軍の将校もその学問の重さは良く知っていた。辺境の啓蒙家には圧力を掛けえた彼ら

も本場の本物にはそれができなかつたという話であるが、事実とすれば、虚学の代表のような哲学が現実の教育改革に決定的な力を及ぼし、ひいては今日の教育にまで影響した事例になる。これを以て「虚学無視すべからず」と言うのは強弁に過ぎるであろうか。

**付記** 本稿の執筆直後にたまたま次の二冊を読んだが、前者は学問論として、後者は国家論として、それぞれ拙稿の良い補いになると思った。前者は古本でないと手に入らないが、同氏の書物には今も意味あるものがある。一般に、新刊のベストセラーのみが書物ではない。

1 佐藤信衛『哲学試論集』（一九四一）所収の「初学の戒め」（原型は雑誌『思想』一九三四年四月、七月、九月号にある。）

2 丸谷才一『裏声で歌へ君が代』（新潮社、一九八二年）

別に、日本における創造的技術とその伝統については、西沢潤一氏の最近の諸著作、例えば

3 西沢潤一『技術大国・日本』の未来』

なども参考になる。ここでは日本の科学技術に見られる独自の創造性と、イギリスに発するその伝統を知ることができる。創造的科学的成果として、京大グループのサルの行動学の本もその内に読んで見たい。

- 
- 底本には村田 全編『学問の中の私』（玉川大学出版部、一九九五年七月）を使用した。
  - PDF化にはL<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X<sub>2 $\epsilon$</sub> でタイプセットを行い、dvipdfmxを使用した。

村田全氏のその他の著作については、

科学の古典文献の電子図書館「科学図書館」

<http://www.cam.hi-ho.ne.jp/munehiro/sciencelib.html>  
に収録してあります。

「科学図書館」に新しく収録した文献の案内、その他「科学図書館」に関する意見などは、  
「科学図書館掲示板」

<http://6325.teacup.com/munehiromeda/bbs>  
を御覧いただくか、書き込みください。